子ども向け伝記『軍神西住戦車長』論

―軍神の形成と作品の特徴―

服部裕子

はじめに

アジア・太平洋戦争中の子どもの愛読書については、当時の読書調査を手がかりに、拙稿「戦時下の子どもの読書」(『愛知教育大学大学院国語研究』第一七号　二〇〇九・三)で述べた。その中で取り上げた、『軍神西住戦車長』(富田常雄　大日本雄弁会講談社　一九三九・六)(1)は、一九四〇年に実施された文部省推薦児童図書に関する全国調査(2)によると、推薦児童図書三九冊(一九三九・六～四〇・三)のうち読者数最多順位は二位、絵本『桃太郎』『金太郎』などとともによく読まれ、絵本以外の単行本の中では首位であったことが報告されている。別の読書調査「地方少国民の読書生活」(『少国民文化』一九四二・八)においても、書名が挙げられている。また大阪国際児童文学館が所蔵している『軍神西住戦車長』の一冊は一八刷されており、三康図書館所蔵の『軍神西住戦車長』の貸出しカード記録を見ても、頻繁に貸出された時期、一九四〇年六月からの半年間では一九回を数える。こうしたことから、『軍神西住戦車長』の人気の高さがうかがえる。

それでは、当時子どもに大きな影響を及ぼしたと思われる『軍神西住戦車長』とは、どのような内容の本であったのであろうか。そもそも軍神とは、武勲をたてて戦死し模範となった軍人に対する尊称のことで、昭和の軍神第一号になったのが、戦車長西住小次郎である。その後真珠湾攻撃の際に〈九軍神〉が誕生するが、〈九軍神〉に関しては、すでに長谷川潮が『日本の戦争児童文学』(久山社　一九九五・六)の中で論じている。しかし軍神西住戦車長に関する論考は調査した限り、ほとんど見られない。そこで本稿では、軍神西住戦車

長の形成過程を述べるとともに、富田常雄『軍神西住戦車長』に焦点を当て、作品の特徴について論じていきたい。ただし前掲の読書調査において、子どもが複数ある戦車長西住小次郎の伝記から、富田常雄の『軍神西住戦車長』を特定できたのかどうかは不明である。したがって本稿では、より低年齢の子ども向けに書かれた久米元一『昭和の軍神　西住戦車長』（金の星社　一九三九・五）や（講談社の絵本）『軍神西住大尉』（久米元一文・伊藤幾久造絵　大日本雄弁会講談社　一九三九・五）等についても言及し、さらに、大人向けの菊池寛の新聞連載小説『昭和の軍神　西住戦車長伝』（東京日日新聞社　大阪毎日新聞社　一九三九・九）とも比較して、子ども向けに富田が書いた『軍神西住戦車長』の特徴をさらに明確にしたい。なお、菊池寛『昭和の軍神　西住戦車長伝』は、富田の伝記と同じく文部省推薦図書に指定されている。

一　軍神の形成

西住小次郎陸軍大尉（在職時中尉。死後大尉に昇進）は、一九三八（昭和一三）年五月一七日、日中戦争徐州戦で戦死し、昭和の軍神第一号となった人物である。彼の出身地熊本県上益城郡甲佐町には「西住戦車長顕彰会」があり、西住公園には西住戦車長の胸像が建ち、命日には慰霊祭が催されている。

西住大尉が軍神となった経緯については、菊池寛が著書『昭和の軍神　西住戦車長伝』の中で次のように語っている。

（3）それによると、当時上官だった細見惟雄大佐が西住大尉を武人の典型として顕彰したいという思いから、一九三八年一二月一七日に陸軍省記者倶楽部向けの講演会で語ったところ、聴衆が感激し、翌日の一八日、西住大尉について新聞各紙が書き立てたことから始まっている。細見大佐自身は、西住大尉が自分の部下であったこと、他の将兵に対する配慮などから、講演では、西住大尉を「昭和の軍神」と言わず、典型的な武人という言葉に置き換えていたというが、「東京朝日新聞」でも「東京日日新聞」でも「昭和の軍神西住大尉」と讃えて彼の戦歴・母親の談話等を紹介し写真入りで大きく取り扱っている。見出しを紹介すると、「東京朝日新聞」では「昭和の軍神・西住大尉　陸軍全学校教材を飾る偉勲　鉄牛部隊の若武者」「戦傷も五度」、「東京日日新聞」では、「近代戦の寵児『戦車』に捧ぐ　〝昭和の軍神〟西住大尉」「一戦毎に燃え上る猛然たる戦闘精神」「小次郎の霊よ大陸にあれ！母の膝元に帰る勿れ」などの語句が紙面を飾っている。この細見大佐による講演は二六日夜のラジオでも放送された。彼の戦死当時からすでに七ヶ月経っていた。

保坂廣志が、軍神の形成に新聞が大きく貢献したと指摘したが、後の九軍神の場合も同様、（4）国民の士気高揚のために、西住小次郎を「昭和の軍神」という冠称を付けて崇め、その軍人精神の普及に利用したのである。

西住と同じ戦車部隊に配属され同じく戦車小隊長に任ぜられた司馬遼太郎は、戦後に発表した「軍神・西住戦車長」(5)の中で、西住小次郎が篤実で有能な下級将校であったことはまちがいないが、軍神になりえた理由の一つは、彼が戦車に乗っていたからだ、軍神を作って壮大な機甲兵団があるかのごとき宣伝をする必要があったからだと分析している。当時、司馬は戦車学校でも、戦車部隊でも、西住の話を聞いたことがなかったという。それは、偵察中に流れ弾に当たって死ぬという、戦車長としての実務上あたりまえすぎる戦死であったからだろうと述べている。

陸軍の花形兵器である戦車に関する催しは、すでに日中戦争開始の頃にも見られた。だが昭和の軍神西住戦車長誕生後には、一九三九年一月八日から一五日にかけて、東京朝日新聞社主催、陸軍省の後援で「戦車大展覧会」が靖国神社で開かれ、一六〇〇発の弾痕のある西住の戦車や遺品も展示された。この「戦車大展覧会」に合わせて戦車一五〇台が銀座街を通る「戦車大行進」(一・八)や、陸軍関係者による「戦車大講演会」(一・一一)が催されている。「戦車大行進」の様子は紙上に写真入りで大々的に報じられただけでなく、八ミリフィルムを媒体に新聞社のニュースとして各地で上映された。「戦車大展覧会」も、東京だけでなく名古屋、大阪でも開催されたようである。盧溝橋事件から二年半、日本軍が南京攻略に成功しても蒋介石は抗戦する姿勢を崩さなかった。日中戦争が泥沼化する中で、軍神を形成し国民の戦争熱を高揚させる必要があったのであろう。

陸軍より伝記執筆の委嘱を受けた菊池寛は、文芸家協会会長としてすでにペン部隊を組織し一九三八年秋に従軍していたが、取材のため再度中国大陸に出かけ、一九三九年三月七日から「東京日日新聞」と「大阪毎日新聞」の夕刊紙上に「西住戦車長伝」(〜八・六　一二七回)を連載した。この連載に合わせて同時期、新聞社主催、陸軍省後援で「西住大尉展覧会」(三・五〜一四　上野松坂屋)が開かれ、西住の戦車や大尉の愛用机など遺品が陳列され、話題を呼んだ。

この新聞連載小説は好評を博し、単行本として一九三九年九月に上梓され、ベストセラーになったばかりでなく、翌年一一月には松竹によって人気俳優の上原謙主役で映画化され、(6)いっそう世間の注目を浴びた。スクリーンには、陸軍機械化部隊の協力により、煉瓦の壁や鉄条網を突破し、主砲が火を噴く戦車の姿が実に勇壮に映し出されている。興行収入はその年最高だったという。

菊池の新聞連載と同時期、三月には北原白秋作詞による「西住戦車隊長」(飯田信夫作曲)がビクターレコードより発売されているが、(7)伝記や特集を組んだ雑誌の刊行以外にも、講談・浪曲・演劇・講演会等が次々に催された。(8)

すでに前年一九三八年四月に国家総動員法が公布されており、このように一流の文化人が結集し、マスコミが総動員し

て昭和の軍神西住戦車長を崇める風潮は、当然のことながら子どもの世界にも及んでいる。

「大毎小学生新聞」には一二月一九日第一面全面に「昭和の軍神西住小次郎大尉　激戦三十回、戦車中に散る　烈々たる軍人精神」という見出しで、また「東日小学生新聞」には一二月二一日、第二～三面見開き全面に、「〝昭和の軍神〟西住大尉　神々しい日本武士の姿　永久に輝く戦車長」という見出しで特集が組まれ、両新聞とも写真と西住の戦闘・最期・遺言・両親等の記事が掲載されている。その後も、西住の伝記が掲載される翌年三九年四月頃まで、西住戦車長関連の記事が載せられている。一例を挙げると、「軍神と〝日の丸〟部下の山根准尉が語る大場鎮の奮戦ぶり」（「東日小学生新聞」一二・二二）、「西住小次郎少年　五歳で早〝軍神魂〟」（同新聞一二・二四）、「子供好きな西住大尉」（「大毎小学生新聞」一九三九・二・五）、「どんな寒い日でも素足で体操をした元気な西住少年」（同新聞　三・一三）など。前述の「西住大尉展覧会」に関する記事は、見出しの「武勲を慕ふ小学生満員」が目を引くが、「東日小学生新聞」三月八日、久米正雄作「少年物語　西住戦車長」の連載が始まった日に合わせて掲載されている。久米正雄の「少年物語　西住戦車長」は、「大毎小学生新聞」でも三月一二日から連載された。(9)

単行本の刊行はやや遅れて五月に、本稿で取り上げる久米元一『昭和の軍神　西住戦車長』と〈講談社の絵本〉『軍神西住大尉』、六月に富田常雄『軍神西住戦車長』が発行された。そのほか渡邊善房『ニュース童話集　夜明けの戦場』（清水書房　一九四〇・一二）、齋田喬『放送少国民劇集　少年の歌』（弘学社　一九四三・二）の中でも取り上げられている。また、「大毎小学生新聞」では、軍神西住大尉に捧げる綴り方と図画まで募集している。以上述べてきたように、西住小次郎は軍神西住戦車長として崇められ、マスコミの宣伝効果によって、子どもにとっても身近で、憧れの存在になっていったのである。

二　富田常雄『軍神西住戦車長』の作品世界

富田常雄が執筆した『軍神西住戦車長』は、一九三九年六月、〈支那事変少年軍談〉の一冊として大日本雄弁会講談社より刊行された。読者層は小学校高学年程度であると思われる。本文は三三四頁、八章で構成されている。第二章（便宜上章番号を付す。以下同様）「一直線」には、西住小次郎の五歳（満四歳）から甲佐小学校を卒業し御船中学三年生になるまで、第三章「燃える魂」には、陸軍士官学校合格前から卒業して戦車隊に編入されるまでが描かれている。子ども向けの伝記ではあるが、二五歳の若さで亡くなっているにもかかわらず、士官学校卒業までの生い立ちは作品全体の四分の一弱にとどまっており、やはり戦争読物として編集されている。

第四章「無限軌道」には、上海出征前の心境や戦車の歴史などが含まれているものの、第一章「戦車来る」、第五章以下の「鉄牛怒る」、「陸の駆逐艦」、「戦車進軍歌」、「大君の御楯」には、戦地でのわずか九ヶ月間のできごとが、詳しく記されている。

【陸軍士官学校卒業まで】

西住小次郎の生涯を年代順に追っていくと、「一直線」という第一章の見出しのとおり、当時五歳の小次郎は、祖父の臨終の際「ぼくは陸軍大将になります」と誓い、それ以降軍人になるために努力を重ねていく。作中には、金鵄勲章まで賜った退役大尉の父三作の期待に応えようと、軍人を一途に志望する小次郎の意志の強さ、責任感の強さ、真面目な面が強調されている。もともと小次郎は体が弱く、運動も不得意で運動会の徒競走ではたいてい最下位、小学校時代は眼病まで患い、軍人には不向きな体格であった。そのため、陸軍幼年学校を二度も受験して不合格になる。しかし、それでも祖父の墓前で「落ちても、落ちても」軍人になると誓い、両親の励ましで挫折を乗り越え、かたときも書物を離さず勉学に励むかたわら、柔道部に入って猛稽古を繰り返して体を鍛え直す。陸軍士官学校受験の際には、検査官に体格を褒められるというエピソードまで挿入され、子ども読者が共感できるように配慮されている。

そのほか作中で、おとなしい性格だが戦争ごっこでは大将となって勇敢に戦ったり、夜に墓場を一人で通るほど度胸があるなどの面も見せるが、子ども向け伝記の典型―家事手伝いをする、心やさしく弟や妹の面倒をみるという孝行息子として描かれている。

陸軍士官学校時代においても、嫌な仕事でも引き受ける、何事にも真剣に取り組む小次郎の姿勢に変わりはないが、さらに「ガマの油売り」の物まねをして笑わせる陽気な気質、だれからも敬愛される人柄が加えられた。

注目すべきは卒業間際、父の死前後のエピソードである。作中には、病床の父が小次郎に宛てた手紙が掲載されている。菊池寛の伝記等、多くの伝記で紹介されているが、この作品では多少省略して載せている。(10) その一部を抜粋する。

お前さんとしては閣下が目的ではありません。(中略)たゞ〳〵一途に己の本分を尽くすといふ考へで、学究奮励すればよいのです。もしそのうちに戦死でもすれば、なほ結構です。さうすれば、私等もお前があと三十年生きなくても、閣下になつた時以上の満足を得る訳です。こんなつもりで奮闘すれば、もし生きてゐたら、自然に閣下は間違ひないと思ひます。(中略)所謂忘私奉公の覚悟で奮闘されるやう希望いたします。

(傍点、二重丸に関しては原文どおり。括弧内筆者。以下同様一〇五～六頁)

父親として息子の将来を案じながらも、死を恐れない自己

犠牲的な軍人精神を説いた手紙を、小次郎は遺書のように思って大切にした。この手紙が戦死したときの遺品であったことは事実であるが、手紙の中の「忘私奉公」は、実家を訪問した荒木貞夫中将が父三作の依頼で筆をふるった言葉であり、小次郎が貫こうとした軍人精神を表す言葉として、全編にわたって何度も登場し、強調されている。

尽忠一途の父親だけでなく、母親までもが、父親の遺志に沿い葬式のためにわざわざ帰省する必要はないと電報を打っており、軍人魂を教え続けた両親とその教えに従おうとする息子、まさに戦時下の模範的な親子が描かれている。

【戦車長としての活躍】

戦車長となった西住は、父の手紙を「己の心を鞭うつ教科書」として繰り返し読み、「忘私奉公」の信念を忘れず、「一命を君国にささげ」ようとする。出征時に「お母さん、きっと死んでかへります」（一三五頁）、部下にも「俺は生きては帰らぬよ。大陸の土となる」（二八八頁）と告げている。作中には、当時の部下からの証言に基づいたエピソードが数多く挿入され、自分の身よりも部下を思いやる心やさしい人間像が映し出されている。雨の中行方不明になった山根小隊の戦車を負傷した足で探し回る、寒風の中自分も泥水に浸かりながら水没した戦車内の部下を気遣うなど。そのほか子どもにわかりやすいエピソードとして、自分の慰問袋に入っていたお菓子を部下たちに分け与える、ぜんざいを作ってふるまうなども紹介されている。西住のやさしさは、死亡した中国の新生児にまで及び、無名子と名付けて墓を作る場面も記されている。いつも先頭を切って進み、「ひらりと戦車に飛び乗る青年将校のことを、部下は父や兄のように慕い「軍人精神のかたまりだ」と尊敬する。

ところで、戦車の主な任務は、敵の障害物を撃破して歩兵の突撃路を開くことであるが、菊池の伝記と同様、花形兵器の戦車と戦車将校の任務の特殊性については、第四章「無限軌道」で説明されている。この作品の場合、とくに戦車兵の精神力が重視されている点が特徴的である。「日本の大和魂をもつ兵隊によつて、始めて戦車といふものの威力が発揮される」（一四九頁）「皇軍戦車の威力がある。戦車に魂が入つてゐるのだ」（二五三頁）と記されている。また戦車兵の人格については、標的になり集中砲火されても突入していくだけの猛烈な攻撃精神、たとえ戦車が敵陣で故障しても修理し任務を果たすだけの強い責任感、常に戦車の整備を怠らない地道な努力が要求されると述べている。戦車長西住小次郎は器用、熱心、真面目であるので、まさに「戦車将校として生まれてきたやうな人」であった。

作中には西住が有能な戦車長として、弾雨の中でも通過点を偵察するために自ら出かける、深夜まで戦車引き上げ作業に自分も付き合う、そして勇猛果敢に戦闘を繰り返す場面な

どが描かれている。次に、とくに戦闘場面に注目して述べていきたい。

この作品は〈支那事変少年軍談〉の一冊であるので、地名・日付はある程度記載され、西住の戦歴―上陸した呉淞（ウースン）鎮から戦死した徐州までを辿っている。しかし陣容や歩兵・工兵の動向など、日本陸軍の戦況等の記述は簡単で、三〇余回の戦闘から主戦場が絞られ、尖兵西住と彼の戦車の活躍に焦点が当てられている。

たとえば第六章「陸の駆逐艦　―死闘九時間」では、次のように戦車独特の戦闘場面が詳細に描かれている。以下の引用は、西住戦車が一台で難攻不落の敵陣に突入し、五〇〇近い歩兵に取り囲まれ、「戦車と歩兵の一騎打」となる大場鎮攻略の場面である。

大砲をぶつ放す、機関銃を猛射する。人間だからといつて遠慮はしてゐられない。鉄の重い胴体で踏みにじる。

うつ、踏みにじる。

うつ、踏みにじる。

人間のキヤツといふ悲鳴と怒る戦車の唸で、さながら修羅の地獄だ。（中略）つぶされた敵兵の血が飛び、無限軌道に肉が食ひ込む（二一二～二一三頁）

戦車がぶるんと尻をふると、（人が）ばら〳〵落ちる。又、飛び乗る。うつ、つき刺す、ふり落す、踏みつぶす。

白兵戦は精神の力と力の戦ひだ。

戦車兵は全身ことゞ〳〵く攻撃精神のかたまりみたいなもの。五百に近い敵のまつたゞ中に単車で踏み込んで、びくともしない。（二一四頁）

次の第七章「戦車進軍歌　―蹂躙だッ！」における馬路湾の戦闘場面でも戦車の独自性が描かれている。歩兵が苦戦する中、夜間攻撃に戦車は不利であるにもかかわらず、隊を指揮する西住は戦場に踏みとどまり、先頭を切って敵の標的となり「火の瀧」を浴びる。戦闘室には火花が入り硝煙とガスが充満し、ついには戦車の正面に大きな孔まであけられるが、それでも後退せず、西住自身は敵弾が当たらないよう天蓋にぶら下がり両足を開いたまま、「進め！　蹂躙だッ！　蹂躙だッ！」と怒号し、敵兵をつぎつぎに踏みつぶしていく。

西住はたとえ負傷しても休もうとはせず、手製の下駄を履き、杖をついてでも戦車に乗り込み、ひたすら任務を果たし続けるのである。戦闘場面では、このように「鬼神」、「阿修羅王」となって単車または先頭で奮戦する西住の強靭な精神力と「死線に飛び込む猛牛」になった戦車の圧倒的な破壊力が表されている。

ここで例示した戦闘に限らず、この作品の特徴の一つに、どの戦場においても生き地獄と化すのは敵陣内だけであることが挙げられる。西住が野戦病院で重傷者を見舞う場面があるものの、戦死については一文程度の記述が数カ所あるだけで、日本兵が戦死する描写は、西住の戦死以外は見られない。

実際には、西住の部下も戦死し、上司の高橋中隊長は何度も負傷し戦線から離れている。しかし作中では全く触れられておらず、部下の藤崎が腕を負傷する程度である。「痛快！痛快！西住中尉は会心の微笑をもらして、うつて〳〵、うちまくる。」（二〇九頁）、「人間の山だ。こんない、的はありません。（中略）敵のたふれる数は数へ切れない」（二一〇頁）など、敵兵を制圧する優勢な状況が主に表されている。そのため、戦場であるにもかかわらず、それほど悲惨な印象は受けない。その点で、同じシリーズでも、同じく富田常雄が執筆した『壮烈加納部隊長』（大日本雄弁会講談社　一九三八・九）とは、様相が全く異なっている。事実、日中戦争の初期において戦車は前線に派遣され戦捷に貢献した。『軍神西住戦車長』でも、戦車は苦戦を打開し勝利へと導く無敵の存在として描かれている。

最終章「大君の御楯」の結末近くで、西住は最期を遂げる。通過点偵察中に右大腿部を狙撃され出血多量死するが、その場面は九頁にわたって詳細に描かれている。西住は報告任務を果たし後、己の死を悟ると、後送される戦車の中で当番兵の高松に「立派な軍人にならなくてはならん」と諭し、故郷の風景や家族、父親の手紙の一節「戦死すれば、なほ結構です」という言葉を思い浮かべる。そして「部隊長殿、中隊長殿、西住はお先に満足して参ります、しつかりやつて下さい…お母さん、小次郎はお先に行きます、自分は満足してをりますが、お母さんはお一人でお淋しいと思ひます…」（後略　三二〇頁）と言い残し、最期に「天皇陛下万歳」を三唱して息をひきとる。西住の最期の姿は「神さまのやうにおだやかに気高い」と形容され、ここに軍人として常に死を覚悟していた潔い死が表されている。

さらに結末には、母千代の手紙が掲載されている。その手紙には、息子の戦死を「こよなき名誉として満足」し、魂は「最後まで大陸にとどまつて」国のために戦ってほしいと記されており、手紙の形で軍国の模範的な母の姿が強調されて終わっている。

三　他の伝記との比較

前節では、富田常雄『軍神西住戦車長』の作品内容について、他の作品に触れて述べてきたが、本節では、改めて他の西住戦車長の伝記、子ども向け三作と大人向け一作とを比較し、作品の特徴をより明確にしたい。

【他の子ども向け伝記】

まず、単行本の久米元一『昭和の軍神　西住戦車長』から取り上げる。この作品の読者層は、富田の伝記よりやや低く、小学校中学年程度であると思われる。西住の出征から戦死までが作品全体の半分強にとどまり、戦地でのできごとが占め

る割合は小さく、戦闘場面も少ない。

少年時代については、挿入されているエピソードに多少の違いがあるものの、西住が軍人志望の真面目な孝行息子として描かれていることに変わりはない。しかし富田の伝記とは異なり、父親の手紙が重視されている点は同じでも、子ども読者にわかりやすいように、「忘私奉公」の意味が括弧付きで説明され、手紙だけでなく、その内容を平易な言葉で言い直した小次郎自身の誓いの言葉「お国のために戦死することができたら、お父さんは僕が閣下になつたよりも、もつとよろこんで下さるのだ」（一部抜粋　七〇頁）が添えられている。

また作品の随所に「お国のため」「天皇陛下のおんため」等の言葉が記されているが、戦場における西住の描写に違いが見られる。西住が危機的状況に陥った前掲の馬路湾の夜間攻撃の場面では、西住を中心に戦闘が詳細に描かれているが、他の戦闘場面では、戦車隊だけでなく、歩兵・工兵が連携して攻撃する日本陸軍の状況が冷静に記述されている。負傷した歩兵中隊長の楯となった戦車に歩兵が感謝する場面や、戦功をあげられたのは、西住を慕う部下が隊長のために死ぬ覚悟で働いたからだという解説が付された箇所もあり、富田の作品ほど、西住単独の戦功や戦車兵の精神力が強調されてはいない。さらに結末部分、作品全体の五分の一近くが西住の戦死前後の状況に充てられ、部隊長、遺族となった母親と妹の様子が詳しく伝えられている。母親と妹が軍神となった西住の戦車の展示を見学する場面まであり、子ども読者にとっての身近なできごとと結びつけている。なお、この本には戦車の写真が掲載されており、無数の弾痕から、戦闘の凄まじさを想像することができる。

二番目の作、〈講談社の絵本〉『軍神西住大尉』は、前作と同じ久米元一が文を書き伊藤幾久造が絵を担当している。この絵本では戦地でのできごとが作品全体の三分の二を占め、勝尾金弥が指摘するように、「伝記というよりも戦場での状況報告」になっている。(11) たとえば富田の伝記と同じ引用部分、大場鎮の戦闘場面では、「西住大尉ハ『ナニヲ　コシャクナ』ト　ザンガウノ上ニマタガッテ　ミギヒダリニウチマクリ　トウトウ　ナン百ニントイフテキヘイヲ　ミナゴロシニ　シテシマヒマシタ」（二六頁）と記述され、事実経過が簡単に報じられているだけである。しかし中国を制圧していく日本軍と「つよくて、やさしい、西住大尉」が軍人の手本として描かれている点では同じである。西住が戦場から妹に手紙を出す場面、母と妹が神社で祈る場面が挿入され、戦地と銃後を結びつけている点が印象的である。なお、冒頭には西條八十の「軍神西住大尉」の歌が掲載されている。

三番目の作、久米正雄「少年物語　西住戦車長」は、前述したように、菊池寛の新聞連載と同時期に「東日小学生新聞」と「大毎小学生新聞」に連載された読物である。前述したどの作品とも異なり、たとえば中学生の時、神話の山阿蘇山に

登り、神武天皇から続く日本人の血を自覚し初めて士官学校入学を決意しており、幼年学校受験失敗には全く触れられていない。前掲の父親の手紙でも、「閣下にならずとも大君の御楯となつて散るのが、この父への最上の孝行、祖先の誉、またお前の本分なのだ」（第二三回）と記述されている。このように、かなり作者の脚色した部分が目立つ。また読者の小学生に配慮したのであろうか、連載三十回のうち半分の一五回、「そのふるさと」から「一生一度の喧嘩」までは、幼児期から小学校時代のできごとで占められ、戦地でのできごとは、最後の六話「あゝ軍神」だけである。しかし、この作品でも、負傷しても勇敢に戦い続ける西住単独の活躍と「忘私奉公」が軍人精神を表す言葉として重視され、その点では共通している。

以上、富田の作品と比較しながら、子ども向けに書かれた西住小次郎の伝記について述べてきたが、重点を置いた年代や戦闘場面の描写に差異があるものの、どの作品にも模範的な軍人精神が強調されていることは明らかである。

【一般向け作品　菊池寛『昭和の軍神　西住戦車長伝』】

菊池寛『昭和の軍神　西住戦車長伝』は、西住の旧部下や上司・縁故者などの談話・手記・手紙等を主体に構成されている。作者菊池が「純粋無垢な青年士官の生涯に仮作や想像を容れる余地はない」と語っているように、(12) 作者の主観はとくに戦闘場面で抑制されている。

大人の読者が主対象の作品なので、故郷甲佐町、祖父、両親に関する記述は詳しいが、たとえば幼年学校受験失敗は一行の記述があるだけで、少年時代は簡略化されている。作中には当時の部下が西住を偲ぶエピソードが数多く掲載され、西住の部下を思いやる人間像は富田の作と同じである。しかし大きな相違点がある。その一つは戦場の描写である。菊池の伝記「戦歴」の章には、人名・地名・時刻・地形・陣容などが詳細に記され、西住小隊だけでなく、歩兵・工兵・他の戦車隊の動向など日本陸軍の戦況が伝えられており、西住の行動・言葉などの記述は少ない。前掲した富田作の大場鎮攻略の戦闘場面も、菊池の作品では以下のようである。

約五十名の敵兵は、散兵壕を捨てゝ戦車に向つて突撃して来た。

「蹂躙」

と、号令すると西住大尉は全速力を以て、敵の真只中へ乗り入れたのである。

此時、西住戦車は、文字通り、敵兵を蹂躙した。流石の敵も無限軌道に蹂躙され、或は蹴られつゝ算を乱して退却した（三三八頁）

このような菊池の淡々とした描写に比べて、富田の西住伝が、いかに精神面に重点を置き、勇敢に戦う姿を強調して物語っているのか明らかである。敵兵の数も富田の作品では

五〇〇と誇張されている。また、菊池の伝記には、戦地の生活描写の中に、中国兵の死体の悪臭やコレラ菌が蔓延する不衛生な状態、水田地帯に雨天でも地面にわらを敷いて眠る露営など、兵士を取り巻く劣悪な生活環境が表されており、現実の戦地がどのような状況に置かれていたのかを垣間見ることができる。しかし富田の作品から子ども読者は、どれほど想像することができるのだろうか。

たとえば西住が兵士にぜんざいを作ってふるまった場面を見ると、菊池では「退屈なので、兵はあづきをちぎりに行つた」(三〇七頁)、富田では「畑から小豆を拾ふ」(一八三頁)と記述されている。材料のあづきが略奪物の可能性もありうるが、(13) どちらの作品でも、ただ明るいなごやかな団らんの一コマとして描かれているだけである。富田の作品の場合には、検閲によって「西住が部下の捕虜虐待を叱った部分について内務省から削除を命じられた」と、山中恒が明かしているが、(14) 児童読物は「児童読物改善ニ関スル指示要綱」(一九三八・一〇)通達以降、いっそう厳しい基準で統制された。言論統制はもちろん児童読物に限られたわけではない。しかし大人とは異なり、行間を読めない子どもには、戦地の実状や戦場の悲惨さがますます伝わりにくい状況になった。それに比して、作品に一貫して流れる軍人精神が子どもに深く浸透していくことは、難しいことではないだろう。

おわりに

少年時代の西住について補足すると、『軍神西住大尉と母校御船中学』に掲載された旧師・旧友・同窓生の証言によれば、実際のところ、西住は努力家には違いないが、傑出したところはなく、無口で穏和、当たり前のことを当たり前に真面目に取り組むタイプ、記憶に残らない「目立たない生徒」だったという。(15) 小次郎の母校御船中学校から陸軍士官学校には小次郎とともに五人が同期に入学しており、母校は軍人輩出において「日本一の中学校」であった。その中で西住小次郎は平凡な一少年であったのである。その彼が戦時体制の中で、前述したように、「昭和の軍神」として一躍脚光を浴び、軍神像が形成され戦意高揚に利用された。子ども向けの伝記富田常雄『軍神西住戦車長』の中では、「忘私奉公」の一念で勇猛果敢に任務に服する軍人西住の姿を「神々しい」「尊い後光がさしてゐる」と形容している。それは、同じ西住戦車長の伝記でも菊池自身が西住小次郎の人間性に共鳴し描こうとした作品世界とは異質であった。菊池の伝記には、他の部隊所属の上等兵の手紙―「軍神等にならなくとも良いからご健在であつたら」(六七頁)、西住のめざましい戦功の陰には、上司との「精神的結合」があったことを忘れてはならないという本音も掲載されている。

確かに菊池の伝記は実際に戦意高揚に貢献しており、また

前述したように、言論統制下、どこまで西住小次郎の実像に迫ったのか疑問は残る。けれども菊池の伝記との比較によって、富田の伝記をはじめ、子ども向けの伝記には、軍人としての模範的な生き方だけがどれほど強調されて描かれているのかについて明確にすることができた。子ども読者が、憧れの軍神西住戦車長の伝記、とくに富田常雄の『軍神西住戦車長』を読むことにより、日本の戦車への信頼を高め、それを支える精神力の大切さを認識したことは確かであろう。この作品は、銃後の子ども読者に、とくにやがて戦地に赴く少年読者に、軍人精神を植え付けるための絶好の書になったのではないか。人気が高かったこの本の影響力は、〈九軍神〉ほどではないが、看過できないほど大きかったように思われる。

富田の『軍神西住戦車長』が、同じ〈支那事変少年軍談〉に収められた伝記、前掲の『壮烈加納部隊長』、『空の英雄南郷少佐』（一九三八・一二）に比べて人気が高いのは、被伝者の西住小次郎が軍神であり、さらに文部省推薦図書に指定されたからであることは言うまでもない。

（表記については、原則として漢字は新字体に改めた）

注

1　奥付には編集兼発行者の高木義賢の名しか記されていないが、「はしがき」には細見大佐の援助を受け富田常雄に執筆を依頼したと記されている。

2　平澤薫「児童読物調査について―中間報告―」（『新児童文化』第一号）参照のこと。文部省推薦児童図書（一九三九・六～四〇・三）三九冊について全国各地の小学校三〇校（尋常小学校一年生から高等小学校二年生）で調査した。

3　菊池寛『昭和の軍神　西住戦車長伝』（東京日日新聞社　大阪毎日新聞社　一九三九・九）「発端」参照のこと。

4　保坂廣志「戦争とジャーナリズム」『琉球大学法文学部紀要』第三二号　一九九〇・三　七四頁

5　司馬遼太郎「軍神・西住戦車長」『歴史と小説』集英社　一九七九・六　二六三～二六四　二六七頁

6　「西住戦車長伝」監督：吉村公三郎　原作：菊池寛　脚本：野田高梧　配給：松竹大船　上映時間：一二六分　モノクロ　一九四〇年一一月封切り

7　塚越電脳音楽工房「昭和歌謡大全　戦前戦中編」http://www005.upp.so-net.ne.jp/tsukakoshi/kayoudaizenn/kayou052.html

8　中島亦雄『軍神西住大尉と母校御船中学』熊本県立御船中学校　一九三九・六　四七四～五三六頁

9　久米正雄作「少年物語　西住戦車長」は「東日小学生新聞」（三・八～四・一一）と「大毎小学生新聞」（三・一二～四・一〇）に連載された。「大毎小学生新聞」では冠称「少年物語」が削除され、「シロヂにアカく」が一回分欠落しているため、連載回数は二九回

である。

10 手紙の実物筆者未見。菊池の伝記に掲載された文と異同がある。そのほかの箇所でも、足を負傷して下駄履きで戦闘に参加した時期などに事実認識の違いが見られる。

11 勝尾金弥『伝記児童文学のあゆみ』ミネルヴァ書房 一九九九・一一 二二五頁

12 菊池寛前掲書 二六頁

13 菊池の『昭和の軍神 西住戦車長伝』に掲載された手記の中には、西住が徴発を禁止している場面やお金を支払って中国人農家から野菜を収穫した場面も記述され、あずきが略奪物であったのかどうか真偽は不明である。

14 山中恒『戦時児童文学論』大月書店 二〇一〇・一一 八〇頁

15 中島亦雄前掲書 二四四頁

（はっとり・ゆうこ 本学非常勤講師）
平成七年三月修士課程修了